

一 研究目的

この研究では、「中古天台口伝法門」と「天台三大部」の関係に注目する。

従来より口伝法門は、教理の学習・学問に目を向けていないかのように思われている。しかし実際には、天台三大部の学習がおろそかにされている訳ではないと考えたい。つまりこの両者の関係を従来見落としているように思われ、ここを検討してみたい。天台三大部の学習は、天台教学の基礎であり、日本天台に脈々と生きていると考えたいのである。

二 天台三大部

天台三大部は、または「法華三大部」と言われる文献である。これらは天台智顛によって講述され、天台教学における最も基本となる文献である。そして荆溪湛然は、この三大部の詳細な注釈書を作成した。そしてこれ等「三大部章疏」は、日本天台に多大な影響を及ぼしたことは言を俟たない。

日本天台において代表的な天台三大部の研究書としては、平安末期に証真が撰述した『法華三大部私記』がある。また鎌倉から室町時代には、『三大部伊賀抄』や『三大部廬談』など大部の文献が編集作成された。なおまた比叡山や京都は勿論のこと、地方の談義所などをはじめとする学問拠点での講義録などが記録・編集されたし、尊舜『三大部尊談』のように要文や問題点を中心とした覚書文献も見られるようになる。あるいはまた三大部を様々に解釈した、所謂「偽書」と考えられる文献までもが多数登場するのである。

なお忘れてはならない点として、天台三大部の研究と『法華経』との解釈・研究が天台論義の上で高度に発展し、密接に関係していることが注目される。

さらにまた江戸時代においても、慧澄痴空が『三大部講義』を、大宝守脱が『三大部講述』を撰述している。これらは日本天台における三大部の受容と研鑽の成果である。

三 口伝法門

口伝法門は、通途は口によって法門を伝授することである。口決相承とか面授相承などは、特に秘義・奥義を師弟面授の上で、口頭により相伝・伝授することであり、そこは記録・筆録を許さず、師匠よりの相伝書状が大きな意味を持つことになる。これが切紙や折紙などによって許可・印信・惣附属・目録伝授などと言われて重宝されたのである。

日本天台においては、恵心檀那両流口伝法門として様々に発達したことは周知の如くである。確かに印信・切紙は重宝されたようであるが、それが本来はどのような手順を経て相伝されたのかは、従来あまり注目されていないように思われる。この点を確認検討してみることにはしたい。

四 口伝法門文献と天台三大部

口伝法門が盛んになるに及んで様々な文献が登場してきたが、ここでは恵心流の中心的な諸文献に見られる三大部に関係した部分に注目してみる。

さらにまた日本天台独自の三大部理解として、訓点を重視する学習の様子が見られる。例えば『摩訶止観』の「止観明静前代未聞」や『止観輔行傳弘決』の「復疎三諦」に見られる訓点口伝などは、とても日本的な学問を示す例であり、それが口伝・口決であったりするるのである。また日本的な三大部の受容として、三大部の要文をさらに進めて偈頌化とも言える文章が登場する。これもまた中古天台における特徴である。

【キーワード】 口伝法門 天台三大部 中古天台